The Hand of Ethelberta に見る トマス・ハーディの階級意識

吉　井　浩司郎

(1) 序

The Hand of Ethelberta は、トマス・ハーディの小説としては、その過激な内容の故に活字となることはなかった *The Poor Man and the Lady by the Poor Man* から数えて第六作目にあたり、活字となった処女作 *Desperate Remedies* から数えて第五作目にあたる。また、ハーディが小説家として地歩を固めた *Far from the Madding Crowd* の好評を受けて、the *Cornhill Magazine* の編集長 Leslie Stephen からの連載の依頼に応じてハーディが制作した作品であり、また、ハーディが1874年にエマ・ラヴィニア・ギフォードと結婚したあと制作された作品でもある。

レズリー・スティーブンから連載の依頼を受けたときハーディは、後に *The Woodlanders* となるはずの作品を構想していたのではあるけれども、前作の *Far from the Madding Crowd* が匿名で出版されていたので、その作者に関して the *Spectator* の書評の中で、George Eliot の作かという風に見られたのをハーディは褒め言葉とは解釈できずに George Eliot の模倣だと理解してしまったり[(1)]、また、*Far from the Madding Crowd* の作者は house-decorator[(2)] だとか house-painter[(3)] だとかという推測がなされたり、Henry James から、この作品の中の sheep だとか dogs だけが真実味

を持って描かれている、と酷評されたことに対してハーディは反発して[(4)]、自分だって都会のシーンを舞台とする作品を創作できるのだということを示そうと *The Hand of Ethelberta* を創作することになるのである。

その結果、ほとんどのハーディ研究家は、*The Hand of Ethelberta* が出来の悪い作品だということで一致している。例えば、ハーディ小説の初期の研究者の一人 Harvey Curtis Webster は、“*The Hand of Ethelberta* is, I believe, Hardy's poorest novel.[(5)]” とまで言っている。また、Desmond Hawkins は、次のように指摘する。

> Looking back on it (= *The Hand of Ethelberta*) a hundred years after it was written it is easy enough to dismiss the book as a fiasco.[(6)]

この作品がこのように不評であったのには理由がある。人物たちの造形に関して言えば、女主人公のエセルバータを除けば、十分な肉付けがされているとは言い難い。また、ストーリーの展開は、“incredible and contrived[(7)]” で、その典型を示せば、女主人公のエセルバータに三人の求婚者がフランスのルーアンの、とあるホテルに次から次へと求婚にやって来て鉢合わせする様が描かれていたり、また、ストーリーの最後の方で、エセルバータとマウントクレア卿との秘密の結婚式の挙行をそれぞれの身内たちに加えてエセルバータに献身的な愛を捧げ続けるクリストファまでもが阻止しようと、てんやわんやの行動をする様が描かれていたりと、リアリスティックな展開が無視された作品となっている。

しかし、これらの欠点にはそれなりの理由がある。この作品に対して付されたサブタイトル “A Comedy in Chapters” が示しているように、ハーディは「喜劇」を意図していたのであり、また、ハーディがこの作品の1895年版の Preface の中で述べているように、この作品は “an

interlude between stories of a more sober design”なのである。因みに、ハーディは“General Preface of the Wessex Edition of 1912”の中で、彼の小説作品を、1. Novels of Character and Environment、2. Romances and Fantasies、3. Novels of Ingenuity、というように三分類したのであるが、*The Hand of Ethelberta* は3. Novels of Ingenuity の中に分類されている。ハーディのいわゆる major novels はすべて1. Novels of Character and Environment の中の作品であって、*The Hand of Ethelberta* を major novels を分析する方法と同様のやり方で読解しようとすると、ウェブスターとかホーキンズのような結論に至るしかないのである。[8] 従って、もしもこの作品を評価する方法があるとすれば、それは、Peter Widdowson とか Robert Gittings が実践したように、女主人公のエセルバータの中にハーディの階級意識が投影されている点に着目してこの作品を評価する方法である。

それではこの小論において、彼らの業績を踏まえながら、*The Hand of Ethelberta* の中に見られるハーディの階級意識の一端を明らかにしよう。

まず、*The Hand of Ethelberta* 創作時点でのハーディの社会的身分を見ておこう。

(2) *The Hand of Ethelberta* 創作時点でのハーディ

社会身分から見ると、ハーディ家は彼の父も祖父も石工であり、父親の代に数人の石工職人たちを雇う経営者になっていた[9]とはいえ、ハーディは基本的には労働者階級出身であった。また彼の母は、ハーディの父と結婚する前は Jemima Hand といって、ある一家の cook[10] をしていた家事使用人であった。なお、ある一家の butler（執事）をしていたジェマイマの父が亡くなったことで、ハンド家は経済的に困窮し、14年間に

わたって教区の厄介になるという[11]、ハーディの母親はそのような困窮一家の出であったのである。だからこそジェマイマは息子に期待するところ大であったようで[12]、ハーディの教育には熱心で[13]、ハーディに教育を身につけさせ、やがてハーディは Dorchester の建築家 John Hicks の徒弟となり、その後もっと高度な建築技術を学ぼうとロンドンに出て、建築家 Arthur Blomfield の助手となり、小説創作をしながらも、1871年にセント・ジュリオット教会の修復のため、コーンウォールに行き、そこで将来の妻となるエマ・ラヴィニア・ギフォードと巡り会うのである。

ここで、まず我々はハーディとエマとの身分の違いに注目しておく必要がある。なぜなら、労働者階級出身という劣等意識がハーディには常にあって、どうやら、事務弁護士[14]の娘であり、中流階級出身のエマに対してハーディは自分の出自を明らかにできず、この身分の違いが様々なところで二人の関係に影響を及ぼしていたようだからである。例えば、二人の結婚式を取り上げてみよう。この結婚式についてパトリシア・インガムが述べているところを引用してみよう。

> 二人の結婚は、1874年の秋に、ロンドンで行われたが、ハーディの家族は誰も出席しなかった。ギフォード主教座聖堂参事会員が式を執り行い、ギフォード家のもう一人の家族である兄のウォルターが立会人を努めた。式に出席した親戚以外の人といえば、ハーディが下宿していた女家主の娘ただ一人で、この人が二番目の立会人となった[15]。

このような結婚式になったのは、Carl J. Weber の指摘によれば[16]、エマの父親がこの結婚に反対していたためということである。また、エマの父親はハーディのことを「おこがましくも結婚して我が家族の一員となった生まれの卑しいがさつ者[17]」と見ていたのである。労働者階級の身内を

この結婚式に参列させようとは思わなかったハーディの心中はたやすく想像することができるだろう。事実、ハーディは自分が労働者階級出身であることをエマに知らせなかったし[18]、エマを自分の家族に会わせることを意図的に避けていたようなのである。小説家となっているハーディはミドルクラスとは言えるが、彼の身内はみな労働者階級なのである。ハーディの心の中に潜む階級についての劣等意識が、自分の結婚式に自分の身内を誰一人招待しないという行動をさせたのだろう、と思われる。

ハーディが *The Hand of Ethelberta* を創作した頃は、社会階級という点で、労働者階級一家という "humble origins"[19] の出身でありながら、middle class の妻と結婚し、ロンドンでの文学サークルの人々とも交際を続けているという、自分の寄って立つべき身分の定まらない領域、つまり、労働者階級でも middle class でもない中間領域とでも言うほかないような所に身を置いていた、と言うことができるのである。いわば、精神的な意味での déraciné である。

ハーディがその後、*Far from the Madding Crowd* のみならず、*The Woodlanders*、*The Return of the Native*、*The Mayor of Casterbridge*、*Tess of the d'Urbervilles*、*Jude the Obscure* 等の彼の主要小説の中で田舎の人々の生き様を同情を持って描いたにもかかわらず、Robert Gittings は、大家となったハーディが故郷の人々からあまり好意的には見られていなかったことを、次のように紹介している。

> His cousin Theresa, still living eccentric and witch-like in the lane in Higher Bockhampton, had a short way with enquiring ladies and gentlemen from London, since she always told them that Hardy should have led a useful life like his brother Henry the builder, and not bothered with writing. If these were the reactions of Hardy's relatives after fifty years of his fame, one can understand how marriage to a "lady" and his

mixing with London society must have seemed now, and his reluctance to risk confrontation yet.[20]

上掲の引用は、ハーディが田舎の側にも精神的な意味で身を置けるような所はなかったであろうことを示している。

それでは、節を改めて、ハーディの社会身分と *The Hand of Ethelberta* との関係性を見てみよう。

(3) *The Hand of Ethelberta* に見られる自伝的要素

この作品の女主人公 Ethelberta Chickerel は、上流階級の Doncastle 家の執事をする父を持つ労働者階級出身でありながら、教育を身につけて上流階級の Petherwin 家の governess（女家庭教師）となって、その家の息子と結婚するも、その未成年の夫が新婚旅行中に風邪が元で亡くなり、その後間もなくこの結婚に反対していた夫の父親 Sir Ralph Petherwin も後を追うように亡くなる。それから、亡くなった夫の母親レディ・ペサウィンによってドイツの Bonn の寄宿学校に遣られて、上流階級に相応しい女性となるべく教育を受けて、帰国してきて、社交界にデビューする。その後エセルバータが出版した詩集が原因でレディ・ペサウィンと修復不能の口論をし、ロンドンの屋敷の借家権以外の遺産を遺してもらえず、レディ・ペサウィンの死後、エセルバータは、ペサウィン夫人として自活していかなければならないところから、ほぼこの作品の物語が始まる、と言っていいだろう。

チッカレル家は、先ほども述べた執事をする父親チッカレル、病弱な母親、そして以下の十人の子どもたちで構成されている。それらの子どもたちを上から紹介すると、長女で料理人をする Gwendoline、次女で

女中をする Cornelia、長男で大工の Sol、次男でペンキ職人の Dan、そして女主人公のエセルバータ、教育を身につけて見習い教師をする Picotee、そしてその下に、Joey、Emmeline、Geogina、Myrtle。

この作品における自伝的要素に関しては、Robert Gittings がこの作品の New Wessex 版の“Introduction”と彼の著書 *Young Thomas Hardy* に詳しいのでそれらの著書を参考に記述する。

The Hand of Ethelberta におけるチッカレル家の人物たちはハーディの母方のいとこの一人 Martha Sparks の一家をモデルとしており、Louis Deacon と Terry Coleman とが[21]明らかにした若き頃のハーディの恋人で Martha の妹の Tryphena Sparks はピコティのモデルとなっている。また、Martha Sparks は、ハーディがロンドンの建築家時代、1862年の the Great Exhibition に連れて行った女性でもあり、“a lady's maid in the West End of London”で、ハーディがこの女性から聞いた内容が *The Hand of Ethelberta* の中の描写に生かされている、という。

ハーディはこのスパークス家の 6 人のいとこたちから、チッカレル家の10人の子どもたちを創造しているのである[22]。なお、労働者階級出身でありながら、上流社会で活躍する romancer であり、詩も創作するエセルバータは、まさにハーディと同じ立場にある、ということである[23]。

このように、ハーディは自分の身の回りの人々を参考としながら *The Hand of Ethelberta* の中の使用人たちを創造したと言えるだろう。しかも、この作品の1895年の December に付された“Preface”の中でハーディが明らかにしているように、“from the point of the servants' hall”から、上流の人々の生き様が描かれているのである。この但し書きも、ハーディが家事使用人をしていた彼の知り合いから聞いた情報を元にこの作品を創作していることを示している。

それでは、節を改めてこの作品を具体的に見てみよう。

(4) エセルバータに投影されたハーディの身分意識

エセルバータの社会身分とそれに関する意識を中心にこの物語の前半を見ていこう。

エセルバータの階級という点で最初に注目されなければならないのは、彼女の deracination[24] という身の上であり、彼女の心の中にはそのような意識があるということである。それは、次のような事情によって引き起こされている。つまり、エセルバータの未成年の夫が亡くなり、その父もまた程なくして亡くなった後、エセルバータの義理の母すなわちレディ・ペサウィンは、エセルバータが身内と一切交流を断つという条件で、ドイツのボンの寄宿学校で 2 年間上流階級に相応しい教育をエセルバータに受けさせたのである。その結果、彼女は意識の上では未だに労働者階級であるにもかかわらず、その階級から引き離されて、寄宿学校の教育を終えて England に呼び戻されてレディ・ペサウィンの義理の娘兼 companion として社交界にデビューする。このように、レディ・ペサウィンが自分の息子の嫁が使用人の娘であることを世間から隠した結果、エセルバータは自分の出身の階級から引き離されて、上流階級に属しているという意識もないまま déraciné[25] となってしまうのである。第(2)節で述べたようなハーディの精神的な意味での déraciné という意識がエセルバータの人物造形の中に投影されていると言えるだろう。

次に注目されなければならないのは、エセルバータが常に自分の出自が暴露されるのを恐れているという点だろう。どうしてそのような状況になったのかを物語の展開に即して見てみよう。

エセルバータが出版した詩集が上流の社交界で話題になるが、しかし、その内容を巡ってエセルバータと義母のレディ・ペサウィンとの間で激しい口論が展開される。その結果、レディ・ペサウィンは遺言書を法律家に書き直させて、エセルバータには、ロンドンの邸宅の 2 年間の借家

権しか遺さずに亡くなるのである。このような事態に陥ったエセルバータは、ホールを借りて、人前で物語を聞かせるというパフォーマンスをする romancer として経済的自立を計りながら、このロンドンの邸宅の家主を自分の母親のチッカレル夫人とし、自分はこの邸宅を借りて、一番上の姉グウェンドリンを料理人として、次の姉コーネリアを女中、弟のジョーイをドアボーイとして雇って、下の 3 人の妹たちエメリン、ジョージーナ、マートル、の面倒をみる、という計画を立てて、それを実行に移すのである。そして、飽くまでもエセルバータは上流の女主人であるという立場を保ち他の兄弟姉妹たちは使用人という形を取り、同じ身内であることを世間に対して徹底的に隠蔽する。それは、エセルバータの母親が言っているように、エセルバータが a family of servants の出身であることが世間の人々に知られたら、その人々の自尊心が傷つけられて、誰もエセルバータの storytelling のパフォーマンスを聞きに来てくれなくなるからである。従って、エセルバータは姉たちには他家の使用人たちと交流するのを禁じているのである。その交流の中で、エセルバータと姉たちが姉妹であることが暴露されてしまうことを恐れているからである。

このような一家の生活の仕方は、エセルバータと他の兄弟姉妹たちとの間に階級的溝をもたらす。例えば、長兄のソルから、こう言われることになる。

以下の場面は、ロンドンの Exonbury Crescent にあるエセルバータの邸宅の改装工事をしているソルとダンのところに、エセルバータがクリストファを案内してきたときに、ソルがエセルバータに言う台詞である。ソルは、我々労働者に気軽に話しかけないように、なぜなら、世間の人たちに、自分たち労働者と雇い主とその友人との間に、何かあるのではと勘ぐられたら困る、とエセルバータとクリストファとに忠告したあとで、次のように言うのである。

「つまり、おれらはあんたの為に仕事をするのがうれしいのさ。と同時に、あんたはあんたの階級を大事にするりゃあいいさ。だから、バータ、行きたいんなら、さよならするよ。おれたちゃおれたちの階級を大事にするさ。だから、ジュリアンさん、あんたも同様でさ。ダン、お前の気持ちもそうだろう？」[26]

エセルバータは、以上のように、兄たちとの階級の溝に苦しむばかりか、自分の元々の階級の労働者階級に対する後ろめたさと精神的な孤立にも苦しむことになる。例えば、見習い教師をしている妹のピコティがエセルバータに思いを寄せるクリストファに対して、報われぬ思いを寄せていることを知ったエセルバータは、重苦しい気持ちになり、姉のグウェンドリンに、ピコティのことで打ち明け話をしようと、地下の使用人部屋に下りていく。ところが、エセルバータは、グウェンドリンから返って次のような苦情を聞かされることになる。つまり、グウェンドリンは食料雑貨店で young onions を購入したかったので店主に、“chippols”（young onions 関する Wessex の方言）をください、と言うと、店主からそんなものは置いていない、と言われてしまった、もう Wessex に帰りたい、と。このエピソードはグウェンドリンが Wessex の田舎流儀から抜け出せず、都会のロンドンの流儀になじむことができていないことを示しており、結果、エセルバータとグウェンドリンとの間には共通の土俵がないという意味で、エセルバータの精神的な孤立を描いている。

長女のグウェンドリンに打ち明け話ができなかったエセルバータは、次の姉のコーネリアの部屋に行く。その時のエセルバータの心の中が説明されている中に、エセルバータの自分の出身の労働者階級に対する後ろめたい気持ちが描かれている。例えば、

エセルバータが階段を登った時、彼女が階下に降りて来ることにな

った初歩の痛みよりひどい痛みが加わって一層ずきずき痛んだ。彼女の現在の気持ちを噛み締めることによって蘇った彼女の階層と一族に対するあの昔の不誠実感であった。そしてそれを逃れる術がなかった。グウェンドリンは彼女の為なら地の果てまでも行ったことであろう。しかし彼女はグウェンドリンに思いを打ち明けることは出来なかった。(27)

結局、グウェンドリンばかりかコーネリアにも打ち明け話はできず、Wessex の田舎の流儀から抜け出せず都会のロンドンの流儀に馴染めない姉たちと自分との間で、身分の点だけでなく生き方、考え方の点でも溝があることをエセルバータは痛感させられるのである。

以上のような状況でエセルバータは romancer としてのパフォーマンスを続けて経済的に家族を支えていくのだが、そのパフォーマンスも当初の物珍しさが薄れると、やがて聴衆から飽きられてきて、romancer としての仕事が立ちゆかなくなる。それでエセルバータが考え出した次の策が、お金持ちと結婚することで家族を養うことであった。

以上、労働者階級の身内との間のエセルバータの階級的な溝、身内に対するエセルバータの後ろめたさ、孤独感等は、恐らく、ハーディの感じていたものの反映に他ならないのではないか、と思われる。

それでは節を改めて、この作品の結末を見ておこう。そしてそのあとで、ハーディが何故この作品を喜劇として創作したのかについて考えたい。

(5) この作品の結末について

エセルバータの結婚の相手として、クリストファ・ジュリアン、画家

のレディウェル（Ladywell）、ネイ（Neigh）、貴族の男爵という称号を持つ年配のマウントクレア卿（Lord Mountclere）、の 4 人がいる。この中で、クリストファは、その父親の死去のあと上流階級から没落して今は音楽家として細々とした暮らし向きであるという点で、エセルバータの結婚相手の対象から早々に脱落する。この点が、エセルバータが愛するクリストファを結婚相手に選択しないということで、この作品が恋愛物語を扱っていないことを明確に示している。

ところで、ヴィクトリア時代は、例えば、労働者階級の子弟が教育を身につけて学校の教師になるとか事務職につくことで、労働者階級から下層中流階級（lower middle class）に社会の身分の階梯を昇る[28]、という上昇志向の生き方が社会風潮となっている時代であった。この作品の女主人公のエセルバータもそのような考え方をする女性として描かれている。例えば、彼女が妹たちの寝室に来て、彼女たちに教育を身につけさせたいという思いを吐露する次の引用の中に彼女の上昇志向の考え方が見て取れる。

> Here were bright little minds ready for a training, which without money and influence she could never give them. The wisdom which knowledge brings, and the power which wisdom may bring, she had always assumed would be theirs in her dreams for their social elevation. By what means were these things to be ensured to them if her skill in bread-winning should fail her? Would not a well-contrived marriage be of service[29]?

エセルバータは、このような上昇志向の考え方から、家族を養うために、男爵という貴族の称号を持つ裕福で老齢のマウントクレア卿を結婚相手に選ぶのである。

そしてこの結婚に至る過程がこの物語後半に描かれている。その中で、

既に触れたように、フランスのルーアンのとあるホテルで 3 人の求婚者たちが鉢合わせする様や、エセルバータとマウントクレア卿との秘密の結婚式の挙行を、それぞれの身内たちに加えてクリストファまでもが阻止しようと、てんやわんやのどたばた喜劇を展開する様が描かれる。これらに加えて、エセルバータの出自がマウントクレア卿に知られてしまうという状況も描かれている。マウントクレア卿はこの秘密を利用して、エセルバータとの結婚を有利に運ぼうとする。しかし一方のエセルバータは自分の秘密がマウントクレア卿に知られていることは知らない、という状況で物語が進展する。

しかしここで、我々読者は注意しておかなければならないことがある。それは、既に触れたことだが、この作品が“A Comedy in Chapters”というサブタイトルを付されている点である。エセルバータは、度々、労働者階級という自分の出自が暴露されそうになるという危機に見舞われ、ついに、マウントクレア卿に彼女の出自が知られてしまうのである。しかしこのサブタイトルがあることで、読者は、エセルバータはそれらの危機をなんとか切り抜けるだろう、と安心して物語を辿ることができるのである。事実、物語はエセルバータとマウントクレア卿との結婚というハッピーエンドで終わっている。更にハーディは、この物語の最後に、Sequel を大団円の形で加えている。例えば、結婚後のエセルバータはマウントクレア卿の屋敷で実権を握り、一家の財政を立て直し、自堕落な生活を送っていたマウントクレア卿の健康管理もして、100歳までも生きんばかりの健康状態にし、エセルバータの父親の一家には、経済的援助をして、Sandbourne で一軒家を構えさせて中流階級の生活を保障し、妹のピコティに持参金を持たせてクリストファとの結婚の段取りを整えてやる、という結末である。

(6) 結び

前節で見たこの作品の結末に至る過程を見ると、リアリスティックな展開が無視された安直な結末になっているのが分かる。そしてその点がこの作品が失敗作と言われる所以でもある。しかし、ハーディがこのような展開にしているのには理由があるように思われる。つまり、リアリスティックな展開にすると、“humble origins”という自らの出自を隠して、マウントクレア卿と結婚しようとするエセルバータの企図は、失敗に終わる他ないのであって、ハーディの階級意識を仮託されたエセルバータの物語は、実に扱いに苦慮する深刻な展開になる可能性がある。その危険を回避するために、“A Comedy in Chapters” という設定は好都合であったと思われる。なぜなら、“humble origins” という劣等意識の問題は、表層の喜劇というストーリーの展開の背後に押しやられて、深刻な問題になることが回避され、さりげなく扱われることに結果しているからである。更には、エセルバータという女主人公であることは、男性作家であるハーディ自身から距離が取られている点でも、ハーディは彼の階級意識を仮託しやすかっただろう、と思われる。そしてその結果この物語は、下層階級出身の女主人公がその美貌と才覚とによってロンドンの社交界を泳ぎながら、好色な老貴族とめでたく結婚して、領主夫人に収まるという出世物語という印象を強く残しているのである。

ハーディは、どうやら終生、彼の心の奥底に “humble origins” という劣等意識を持ち続けていたようで、それが、*The Life of Thomas Hardy* を書かせた原動力と言えるかも知れない。すなわち Robert Gittings は、彼の著書 *Young Thomas Hardy* の中で、*The Life of Thomas Hardy* はハーディの第二夫人 Florence Emily Hardy の筆によるとハーディはしているが、実は、後世の伝記作者に自分のことを根掘り葉掘りされるのを防ぐために、伝記の決定版としてハーディ自らが書いたことを明らかにして

いる[30]。そういった点に関して、Peter Widdowson は、*The Life of Thomas Hardy* を「事実として提示されたフィクション[31]」と言い、*The Hand of Ethelberta* を「フィクションとして提示された事実[32]」と主張する。更に Peter Widdowson は次のように指摘する。すなわち、ハーディはその本質的 identity の所在を low origins に持ちながら、*The Life.* の中で、下層の親戚たちを疎遠に扱うことで自分の出自を下げないようにし、出世した見栄えの良い親戚を多く言及することで自分の出自を高め、そして、ハーディ自身都会の intelligent としての作家の位置からこの *The Life.* を書くことによって、結果的に、ハーディはその本質的な identity の拠り所を失うことになってしまった[33]、と。言い換えれば、ハーディは社会的な身分の上から見れば、どこにも所属し得ない中間領域にいる、と言えるかも知れない。それが、創作者としてのハーディの社会的身分の上での位置であったのかも知れない。

（注）

(1) Carl J. Weber, *Hardy of Wessex* (New York: Columbia University Press, 1965), p. 97.

(2) Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London and Basingstoke: the Macmillan Press Ltd., Reprinted in 1973, First published in 1962), p. 102.

(3) Robert Gittings, *Young Thomas Hardy* (London: Heinemann Educational Books Ltd., 1975), p. 198.

(4) James Gibson, *Thomas Hardy A Literary Life* (Houndmills, Basingstoke, and London: Macmillan Press Ltd., 1996), p. 68.
Gittings, *op. cit*., p. 201.

(5) Harvey Curtis Webster, *On A Darkling Plain* (the United States of America: Archon Books, 1947, Reprinted with permission, 1964, with a new preface), p. 113.

(6) Desmond Hawkins, *Hardy Novelist & Poet* (London: David & Charles Newton Albot, 1976), p. 64.

(7) Richard H. Taylor, *The Neglected Hardy: Thomas Hardy's Lesser Novels* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1982), p. 59.

(8) この点について、Richard H. Taylor (p. 61) は、次のように述べている。

We should not expect characters on the scale of those in the novels of Character and Environment.

上掲の引用中の“characters”は、*The Hand of Ethelberta* の登場人物たちのことである。

(9) Roger Ebbatson, “5 hardy and class”, Phillip Mallett (ed.), *Thomas Hardy Studies* (Houndmills, Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2004), pp. 114–115.

(10) Peter Widdowson, *Hardy in History: A Study in literary sociology* (London and New York: Routledge, 1989), p. 124.

(11) Peter Casagrande, *Unity of Hardy's Novels: 'Repetitive Symmetries'* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1982), p. 124.

(12) パトリシア・インガム著、『トマス・ハーディ』（鮎沢乗光訳、彩流社、2012年）、p. 18.

(13) 鮎沢乗光著、『トマス・ハーディの小説の世界』(開文社出版、1984年)、p. 8.

(14) 土屋倭子著、『トマス・ハーディの文学と二人の妻』（音羽書房鶴見書店、2017年）、p. 30.

(15) パトリシア・インガム著、*op. cit*., p. 32.

(16) Carl J. Weber, *op. cit*., p. 96.

(17) パトリシア・インガム著、*op. cit*., p. 32.

(18) Gittings, *op. cit*., p. 199.

(19) *Loc. cit.*

(20) Gittings, *op. cit*., p. 203.

(21) Lois Deacon and Terry Coleman, *Providence and Mr. Hardy* (London: Hutchinson & Co. Ltd., 1966).

(22) Gittings, *op. cit*., p. 24.

(23) Gittings, *op. cit*., p. 25.

(24) Richard Nemesvari, *Thomas Hardy, Sensationalism, and the Melodramatic Mode* (New York: Palgrave Macmillan, 2011), p. 156.

Nemesvari は、“a coerced class deracination”と指摘している。

(25) Peter J. Casagrande, *op. cit.*, pp. 118–9.

(26) トマス・ハーディ著・橘智子訳、『エセルバータの手』（千城、1991年）、p. 196.

(27) *Ibid*., p. 240.

(28) F. M. L. Thompson, *The Rise of Respectable Society* (London: Fontana Press, 1988), p. 83.

(29) Thomas Hardy, *The Hand of Ethelberta* (London and Basingstoke: Macmillan London Ltd., 1975), p. 188.

(30) Gittings, *op. cit*., p. 1.

(31) Peter Widdowson, *op. cit*., p. 154.

(32) *Ibid*., p. 154.

(33) *Ibid*., p. 147.